

日中の育児雑誌における父親像の比較研究

総合科学研究科総合文化学専攻 JIANG MINTING (コウ ヒンテイ)

要旨

本研究では、日本で高学歴の父親が性別役割分業観が保守的で、中国の高学歴の父親が性別役割分業観が弱まり、日本の高学歴男性より中国の高学歴男性のほうが育児に力を入れているという背景で行う。

日本と中国の高学歴男性の異なる育児の形成要因を解明するために、高学歴で中流階層の父親の育児状況を反映する育児雑誌を選定した。日本では育児雑誌『FQ JAPAN』中国では育児雑誌『父母必読』、『时尚育児』を取り上げ、その中の一部のシリーズの記事の中に登場する理想的父親像を調査し、それぞれの父親像の形成要因を分析した。また、時代の変遷によって両国の性別役割分業の変化の歴史をも調べ、歴史、文化、社会環境とジェンダーの角度から両国の理想的父親像の形成を解釈した。

両国の育児雑誌を調査したところで、日本では稼ぎ手役割を担いながら、休日育児をすることが理想的父親像であり、中国では稼ぎ手役割を前提として、「ケア、家事、教育」役割を担うという理想的父親像が形成していることがわかった。また、中国では、稼ぎ手役割を担わないフルタイムパパもよく登場して育児について色々語っている。しかし、日本では、稼ぎ手役割を担わない父親は登場していなかった。日本より中国のほうが、男性の稼ぎ手役割に対してこだわりが少ないように見える。中国の理想的父親の役割も豊富で、稼ぎ手役割だけに縛られていなく、子供のケアや教育などに力を入れている。

これらの父親像の比較分析をすると、中国の父親が日本の父親より子供のケアや教育に力を入れる原因を明らかにした。結論としては、両国の教育環境と男性性が異なるため、両国の父親の育児行動を大きく影響している。

両国の教育環境について、中国で教育競争の激化により、父親にも子供の早期教育に関わることが求められる。中流階層の身分を維持するために、子供の教育にいっぱい時間をかける傾向がある。一方で、日本ではこれほど激しい教育競争は見えない。日本で現代家族の主要機能は子どもの第一次的社会化と成人パーソナリティの安定化になり、家庭内の教育役割は専門的機関に代替される。それで、日本父親の家庭教育の参加もかなり低い水準に留まっている。

両国の男性性について、日本では、今でも稼ぎ手役割が男性性の重要な部分である。ケアや家事などの家庭役割は男性性の一部になっていない。そのため、イクメンプロジェクトの始動により、男性の育児や家事役割は求められるようになるが、量的には決して母親のそれと同じではない。これは、中国の男性性と大分異なるところである。中国の男性性は文、武と輸入されてきた男性性からなっている。父親役割について、2000年代から稼ぎ手役割から稼ぎ手と家庭の役割へと変化している。新好男人、ナイバーなどの理想的父親像の登場が父親役割の内容をより豊富にしている。また、父親役割は男性性の一部になっているため、ケアや家事などの家庭役割が中国の男性性の一部になっている。高学歴男性は抵抗感なく、ママのように子供のケアをしたり、家事をしたりすることができる。

このように、日本と中国の教育と男性性はこのような違いがあるため、中国父親は日本父親よりケアや家事、教育に力を入れている。

最後に、残された課題としては、二つがある。一つは日本も中国も同じく塾があるのに、日本では教育役割を外部化しているが、中国では家庭内の教育役割はますます要求されている。日本の家

族機能の変化の以外に、日本の親が家庭内の教育にこだわらない原因について、まだ詳細の文献調査が必要である。もう一つは日本で中国のナイバーみたいに育児する父親はいるが、このタイプの育児する父親は男性性をどのように維持するのかがまだはっきりしていない。